

平成29年群馬県成人歯科保健実態調査 調査報告書

群馬県健康福祉部保健予防課、(公社) 群馬県歯科医師会

I 調査の概要

1. 目的

現在、「群馬県歯科口腔保健推進計画」が推進されていますが、平成23年度には成人歯科保健実態調査を行い、群馬県の成人期歯周疾患状況を把握し、「群馬県歯科口腔保健推進計画」の目標値制定に活用しました。

今回の調査は、県民健康づくり運動の成果を評価して、事業の検証、今後の指針を得ることを目的としています。

2. 調査期間

平成29年11月1日から11月30日

3. 調査対象

- ・(公社)群馬県歯科医師会の定める健診協力医の歯科医院を受診した患者で、当調査への協力が同意が得られた者とした。
- ・35歳から84歳を10歳毎に区分し、1医院、各年齢階級2名で計10名、総数で1,000名を対象とした。
- ・回答が得られた人数は、998名で、その内有効回答数は988名であった。

地区別歯科医院数

1	前橋市歯科医師会	18
2	高崎市歯科医師会	18
3	桐生市歯科医師会	10
4	伊勢崎佐波歯科医師会	10
6	渋川北群馬歯科医師会	5
8	藤岡多野歯科医師会	5
9	富岡甘楽歯科医師会	5
10	安中碓氷歯科医師会	3
11	吾妻郡歯科医師会	3
12	沼田利根歯科医師会	5
14	太田新田歯科医師会	10
15	館林邑楽歯科医師会	8
	計	100

年齢階級別人数

	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
人数	194	197	198	202	197	988

4. 調査項目

①生活状況（問診事項） ②歯牙状況 ③歯肉状況（C P I）※

5. 調査票

調査票は、平成29年群馬県成人歯科保健実態調査票（別紙1）とした。

6. 口腔審査の基準

診査基準及び注意事項（別紙2）により実施した。

7. 調査票の回収および集計

健診協力歯科医院で記載された調査票は、（公社）群馬県歯科医師会で回収し、記入漏れなどのチェックを行った後、集計は県保健予防課にて行った。

※：CPI 判定基準が前回調査時（H23）から変更になったため、新基準に準じた診査を実施した。

II 調査結果

1. 問診事項結果

(1) 歯ブラシの使用状況

今回の調査では、「毎日3回以上磨く」者の割合が、55歳～64歳以外の年齢階級で前回調査時よりも増加していた。特に、35歳～44歳、45歳～54歳の年齢階級で大きく増加していた。また、全体で見ると「毎日2回磨く」者が45.9%で最も多く、次いで3回の39.7%であった。

表1：歯ブラシの使用状況

(H23)歯ブラシの使用状況(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
歯ブラシ1回	10.3%	11.2%	18.3%	17.8%	19.4%
歯ブラシ2回	53.3%	50.0%	42.2%	42.7%	42.3%
歯ブラシ3回	35.5%	36.4%	36.7%	24.9%	32.4%
ときどき	0.4%	1.7%	2.4%	3.7%	3.2%
磨かない	0.0%	0.0%	6.3%	0.8%	1.8%

(H29)歯ブラシの使用状況(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
歯ブラシ1回	7.7%	14.2%	8.1%	16.3%	18.8%
歯ブラシ2回	46.4%	40.1%	54.0%	44.6%	44.2%
歯ブラシ3回	45.4%	45.2%	36.4%	37.1%	34.5%
ときどき	0.5%	0.5%	1.0%	2.0%	2.0%
磨かない	0.0%	0.0%	6.3%	0.0%	2.7%

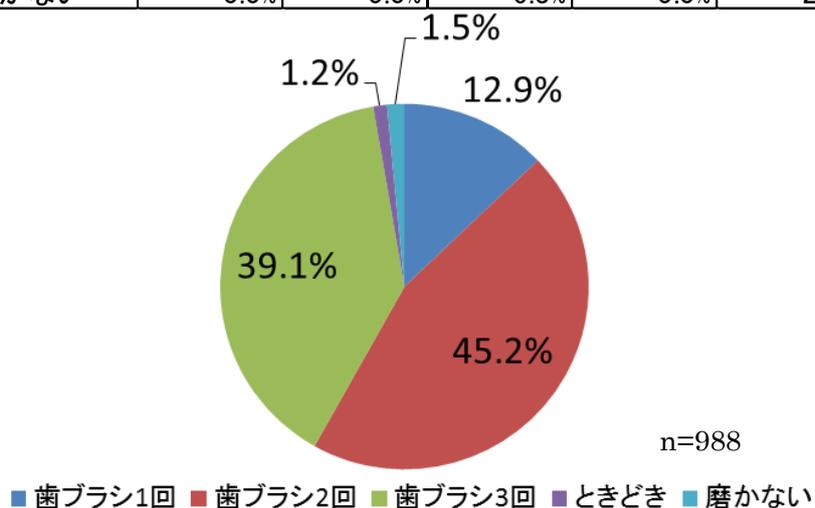


図1：H29「歯ブラシの使用状況」

(2) 歯間清掃器具の使用状況

今回の調査では、歯間清掃器具を使用する者の割合が、前回調査時よりも全ての年齢階級で増加していた。特に、35歳～44歳、45歳～54歳の年齢階級で大きく増加していた。また、全体で見ると使用する者の割合が使用しない者の割合を上回る結果となった。全国値との比較では、全体およびすべての年齢階級で全国値を上回っていた。

表2：歯間清掃器具の使用状況

(H23)歯間清掃器具について(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
フロス	17.8%	21.5%	10.8%	9.5%	6.8%
歯間ブラシ	11.6%	16.9%	29.1%	29.5%	22.1%
使用しない	65.7%	58.1%	55.4%	56.4%	64.9%
未記入	0.0%	1.2%	0.4%	0.4%	2.3%

(H29)歯間清掃器具について(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
フロス	40.7%	37.1%	28.3%	13.9%	11.2%
歯間ブラシ	14.4%	27.4%	34.3%	44.1%	41.1%
使用しない	44.3%	35.5%	36.4%	41.1%	47.7%
未記入	0.5%	0.0%	1.0%	1.0%	0.0%

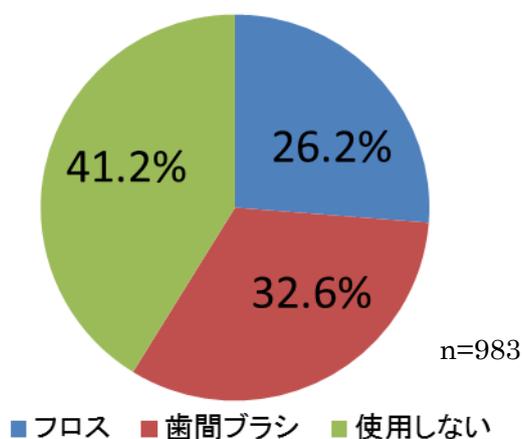


図2：H29「歯間清掃器具の使用状況」(未記入者は除く)

(3) 歯科検診

今回の調査では、歯科検診を定期的に受ける者の割合が、全ての年齢階級で前回調査時よりも増加していた。特に、65歳～74歳、75歳～84歳の高齢者層で大きく増加していた。また、全体で見ると、「定期的に受けている」、「ときどき受けている」者の割合が、それぞれ「受けていない」者の割合を上回る結果となった。

表3：歯科検診の状況

(H23)歯科検診(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
定期的	26.4%	33.1%	39.4%	38.6%	38.7%
ときどき	31.4%	29.8%	27.5%	33.6%	26.1%
受けてない	41.8%	36.4%	32.7%	27.0%	33.8%
未記入	0.4%	0.8%	0.4%	0.8%	1.4%

(H29)歯科検診(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
定期的	30.4%	35.0%	48.5%	48.0%	52.3%
ときどき	35.1%	31.5%	24.2%	29.2%	23.9%
受けてない	34.0%	32.5%	26.8%	22.3%	22.8%
未記入	0.5%	1.0%	0.5%	0.5%	1.0%

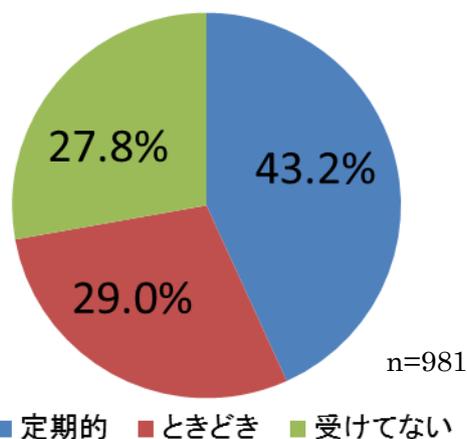


図3：H29「歯科検診の状況」(未記入者は除く)

(4) 歯石除去や歯面清掃の状況

今回の調査では、歯石除去や歯面清掃を定期的に受ける者の割合が全ての年齢階級で前回調査時よりも増加していた。特に、65歳～74歳、75歳～84歳の高齢者層で大きく増加していた。また、全体で見ると、「定期的に受けている」、「ときどき受けている」者の割合が、それぞれ「受けていない」者の割合を上回った。「定期的に受けている」者は前回調査よりも増加（34.1%→42.3%）していた。

表4：歯石除去や歯面清掃の状況

(H23)歯石除去や歯面清掃(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
定期的	24.0%	32.2%	39.4%	37.3%	37.4%
ときどき	41.7%	34.7%	33.1%	37.3%	31.5%
受けてない	34.3%	31.8%	27.5%	25.3%	30.2%
未記入	0.0%	1.2%	0.0%	0.0%	0.9%

(H29)歯石除去や歯面清掃(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
定期的	30.4%	34.0%	48.5%	49.0%	49.2%
ときどき	40.2%	36.5%	29.8%	31.7%	28.4%
受けてない	29.4%	28.9%	21.2%	19.3%	21.3%
未記入	0.0%	0.5%	0.5%	0.0%	1.0%

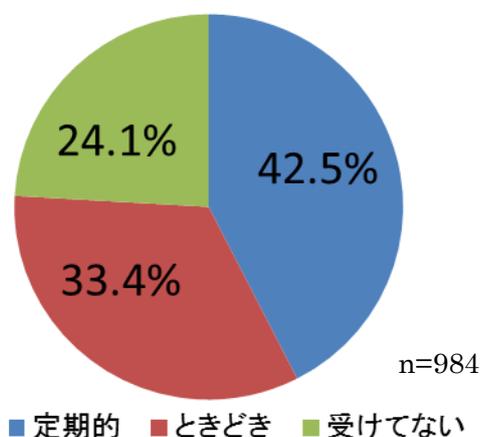


図4：H29「歯石除去や歯面清掃の状況」（未記入者は除く）

(5) かかりつけ歯科医について

かかりつけ歯科医を決めている者の割合は、前回結果と特に変わりはないが、75歳～84歳の高齢者層で4%程度増加していた。また、全体で見ると、「決めている」がおよそ9割と大多数を占めていた。

表5：かかりつけ歯科医について

(H23)かかりつけ歯科医(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
決めている	81.4%	89.7%	90.4%	92.5%	88.7%
決めていない	18.6%	9.5%	9.6%	7.1%	10.4%
未記入	0.0%	0.8%	0.0%	0.4%	0.9%

(H29)かかりつけ歯科医(%)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
決めている	83.5%	86.8%	91.9%	93.1%	92.9%
決めていない	16.5%	13.2%	7.6%	6.9%	7.1%
未記入	0.0%	0.0%	0.5%	0.0%	0.0%

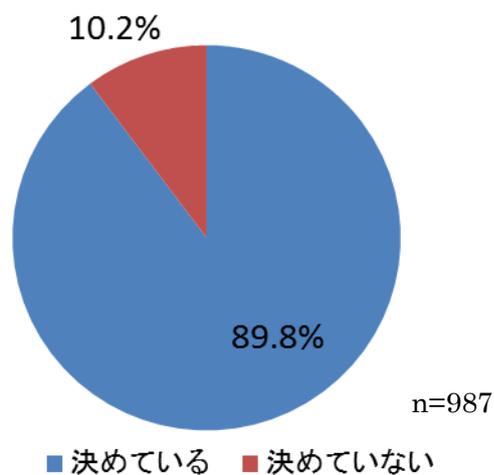


図5：H29「かかりつけ歯科医について」(未記入者は除く)

(6) 喫煙習慣の状況

今回の調査では、喫煙習慣があると回答した者の割合が、前回調査時よりも全ての年齢階級で減少していた。また、一日の喫煙本数の平均についても全ての年齢階級で減少していた。喫煙習慣については35歳～44歳の年齢階級における減少が最も顕著であった。

全体で見ると、喫煙習慣ありが14.7%、なし84.9%、平均本数が14.7本、喫煙開始平均年齢が21.7歳という結果となった。

表5：喫煙習慣の状況

(H23)喫煙習慣					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
ある	38.8%	29.8%	24.6%	17.4%	11.2%
平均本数	18.3	21.2	20.4	17.5	14.5
平均開始年齢	20.4	21.1	21.7	22.7	25.1
ない	60.8%	68.9%	74.6%	80.8%	88.1%
未記入	0.4%	1.0%	0.7%	1.8%	0.7%

(H29)喫煙習慣					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
ある	18.6%	23.4%	13.1%	9.9%	8.6%
平均本数	14.2	16.1	15.4	13.9	10.9
平均開始年齢	19.9	20.5	22.1	24.5	24.1
ない	81.4%	75.6%	86.9%	90.1%	90.4%
未記入	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	1.0%

(H29)喫煙習慣全体	
ある	14.7%
ない	84.9%
未記入	0.4%
平均本数	14.7
平均開始年齢	21.7

n=987

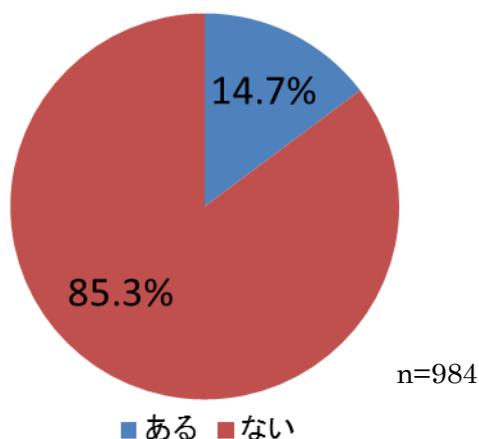


図6：H29「喫煙習慣の状況」（未記入者は除く）

(7) 食事中のむせ・食べこぼしの状況

今回の調査で新たに加えた項目である。「頻繁にある」と回答した者は、全ての年齢階級で少数だったが、「時々ある」と回答した者は、年齢階級が上がるにつれて増加しており、75～84歳の年齢階級においては20.8%であった。全体で見ると、最多は「まったくない」の53.8%であった。「頻繁にある」と「時々ある」を合わせると、11.2%という結果となった。

表7：食事中のむせ・食べこぼしの状況

食事中のむせ・食べこぼし(%)						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
頻繁	0.0%	1.0%	1.0%	0.0%	1.5%	0.7%
ときどき	2.6%	7.1%	10.1%	11.9%	20.8%	10.5%
めったにない	30.4%	34.5%	38.9%	37.6%	31.5%	34.6%
まったくない	66.5%	57.4%	49.5%	50.5%	45.7%	53.8%
未記入	0.5%	0.0%	0.5%	0.0%	0.5%	0.3%

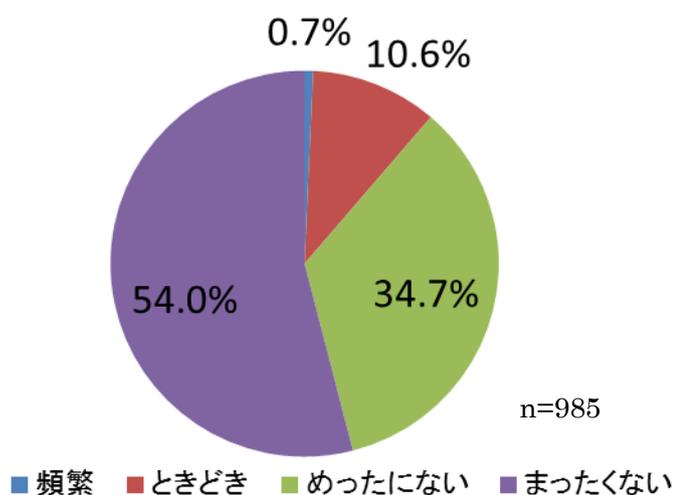


図7：「食事中のむせ・食べこぼしの状況」(未記入者は除く)

(8) 「たくあん」程度の固さの食品を噛みきれるか

今回の調査で新たに加えた項目である。「噛めない」、「噛めるが難しい」と回答した者は、年齢階級が上がるにつれて増加しており、75～84歳の年齢階級においては「噛めない」が7.1%、「噛めるが難しい」が26.9%であった。なお、この両方を合わせた数値においては、65～74歳では26.7%、75～84歳では34.0%であった。全体で見ると、最多は「問題無く噛める」の82.6%であった。「頻繁にある」と「時々ある」を合わせると、17.2%という結果となった。

表8：「たくあん」程度の固さの食品を噛みきれるか

「たくあん」程度の固さの食品を噛み切れるか(%)						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
問題なく噛める	96.4%	93.9%	83.8%	73.3%	66.0%	82.6%
噛めるが難しい	2.1%	4.6%	13.6%	21.8%	26.9%	13.9%
噛めない	1.5%	1.0%	2.0%	5.0%	7.1%	3.3%
未記入	0.0%	0.5%	0.5%	0.0%	0.0%	0.2%

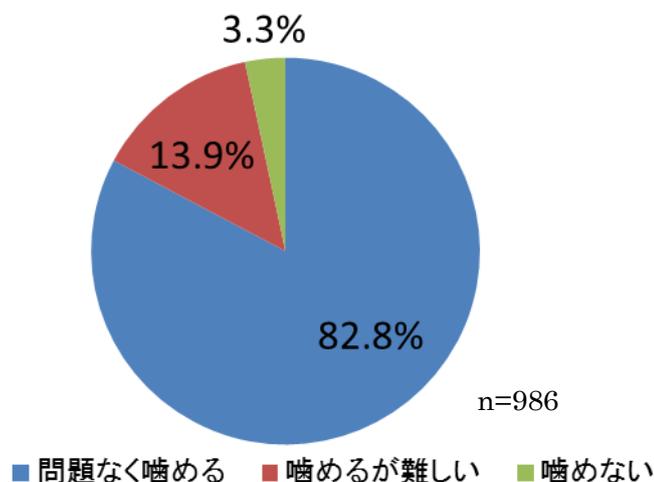


図8：「『たくあん』程度の固さの食品を噛みきれるか」(未記入者は除く)

(9) 「オーラルフレイル」という言葉について

今回の調査で新たに加えた項目である。全ての年齢階級において、「知らない」と回答した者が80%を超えていた。「知っている」および「聞いたことはある」と回答した者が最も多かった年齢階級は45～54歳で、17.8%であった。全体で見ると、「知っている」が2.2%、「聞いたことはある」が10.0%、「知らない」が87.6%という結果になった。

表9：「オーラルフレイル」という言葉について

「オーラルフレイル」という言葉について(%)						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
知っている	2.1%	3.6%	2.5%	2.0%	1.0%	2.2%
聞いたことはある	8.8%	14.2%	11.1%	10.9%	5.1%	10.0%
知らない	89.2%	82.2%	86.4%	87.1%	92.9%	87.6%
未記入	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.0%	0.2%

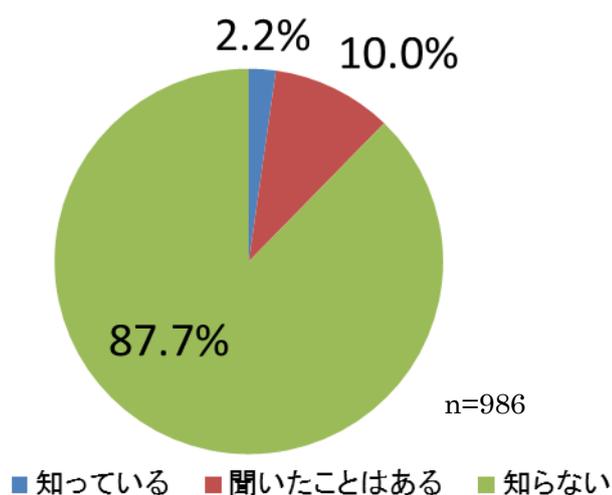


図9：「『オーラルフレイル』という言葉について」（未記入者は除く）

(10) 既往歴の状況（複数回答）

今回の調査で新たに加えた項目で、全身疾患の既往についての回答を得た。複数回答であるため、各年齢階級においては割合ではなく実人数で標記した。年齢階級が上がるに連れて疾患のない者は減っていった。全体で見ると、「ない」が63.5%で最も多く、次いで「高血圧」の19.5%という結果になった。なお、歯科領域と関連の深い疾患である、糖尿病の者は9.1%であった。

表10：既往歴の状況

既往歴(人)						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
ない	176	165	127	96	63	627
糖尿病	1	4	18	31	36	90
高血圧	6	10	39	62	76	193
心血管疾患	1	2	6	9	19	37
脳血管疾患	3	1	5	2	13	24
肝機能障害	1	2	4	5	4	16
腎臓疾患	0	2	2	8	3	15
その他	8	13	19	21	23	84

既往歴(%)	
	全体
ない	63.5%
糖尿病	9.1%
高血圧	19.5%
心血管疾患	3.7%
脳血管疾患	2.4%
肝機能障害	1.6%
腎臓疾患	1.5%
その他	8.5%

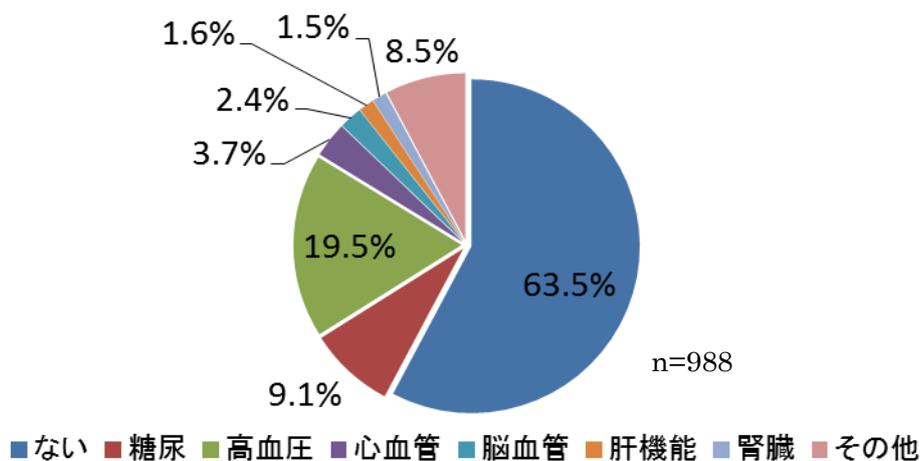


図10：「既往歴の状況」

2. 歯科検診結果（歯牙の状況、歯肉の状況）

（1）一人平均現在歯数

今回の調査では、過去調査時よりもほぼ全ての年齢階級（65～74歳は微減）で、一人平均現在歯数は増加していた。なお、今回調査の全年齢階級における一人平均現在歯数は24.1本であった。

また、80歳で20本以上自分の歯を有する者の割合（推計値）は55.3%、60歳で24本以上自分の歯を有する者の割合（推計値）は、63.0%であった。

表 1 1：一人平均現在歯数（本）

一人平均現在指数(本)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
H16	27.3	26.1	23.0	20.2	15.3
H23	28.0	26.4	24.0	21.8	17.3
H29	28.2	27.2	24.8	21.4	18.9

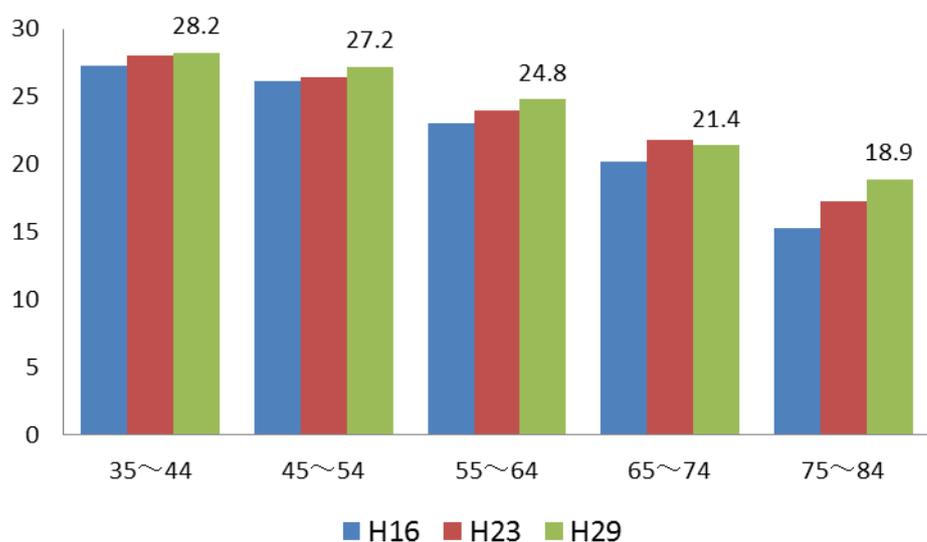


図 1 1：一人平均現在歯数の年齢階級別推移

（2）一人平均むし歯数（DMF 歯数）

今回の調査では、DMF 歯数は、全体で 19.1 本であった。内訳は、未処置歯（D 歯）1.0 本、喪失歯（M 歯）4.8 本、処置歯（F 歯）13.3 本であった。前回調査より、総数で 0.4 本増加しているが、D 歯、M 歯は減少し、F 歯が増加していた。年齢階級が上がるにしたがい増加する傾向は過去の調査と同様であった。

表 1 2 : 一人平均むし歯数 (DMF 歯数) (本)

DMF歯数(本)					
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳
H16	16.3	17.6	19.1	20.7	23.7
H23	15.5	17.6	18.2	19.7	22.5
H29	15.5	17.5	18.9	21.0	22.0

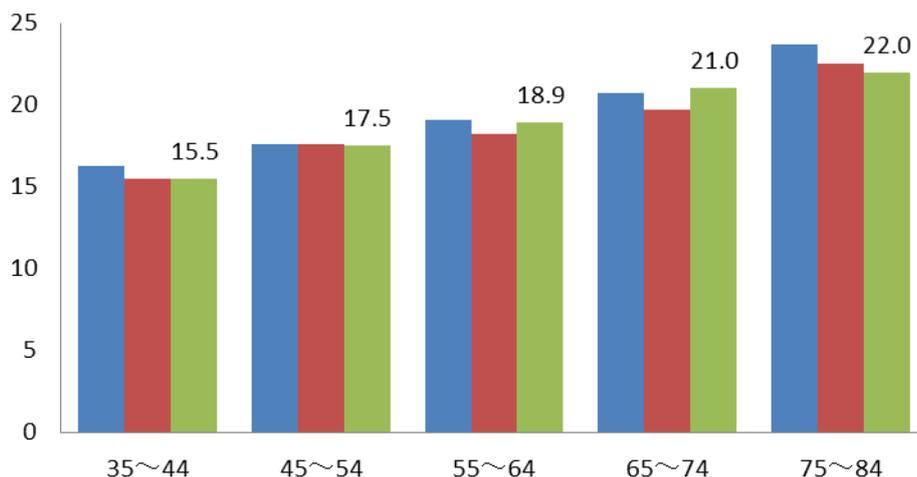


図 1 2 : 一人平均むし歯数 (DMF 歯数) の年齢階級別推移

(3) 口腔清掃状態

今回の調査で新たに加えた項目である。口腔清掃不良者は、65歳からの高齢者層で増加する傾向にあることがわかった。全体で見ると、「普通」な者が最も多くおよそ半数を占めていた。

表 1 3 : 口腔清掃状態

口腔清掃状態(%)						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
良好	47.9%	33.5%	35.9%	33.2%	30.5%	36.1%
普通	40.7%	55.3%	53.5%	52.5%	51.3%	50.7%
不良	11.3%	11.2%	10.6%	14.4%	18.3%	13.2%

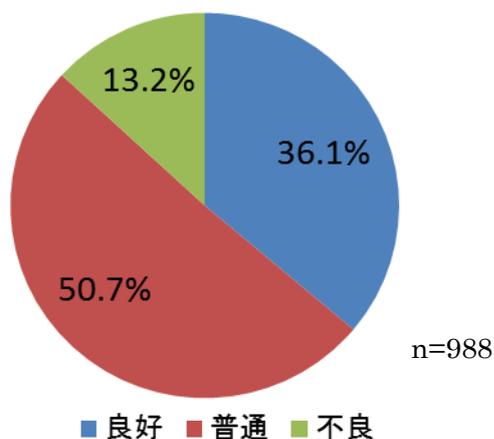


図 1 3 : 口腔清掃状態

(4) 歯石の付着

CPI 検査における判定基準の変更に伴い、歯石の付着に関する項目が削除されたため、今回の調査で新たに加えた項目である。よって、本報では今回の調査結果のみの報告とする。歯石の付着に関して、年齢階級による傾向などは特に認められなかった。全体で見ると、「軽度」、「中等度以上」合わせて 69.5% に歯石付着が認められる結果となった。

表 1 4 : 歯石の付着 (%)

歯石の付着						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
なし	30.9%	27.9%	30.3%	28.2%	35.5%	30.6%
軽度	58.2%	55.8%	56.1%	57.4%	50.8%	55.7%
中等度以上	10.8%	16.2%	13.6%	14.4%	13.7%	13.8%

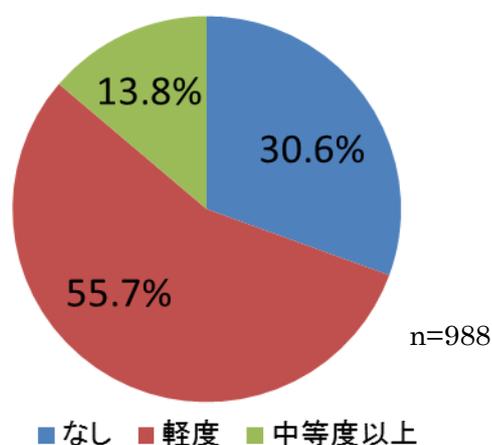


図 1 4 : 歯石の付着

(5) 歯肉出血 (CPI の BOP)

CPI 検査における判定基準の変更に伴い、過去の調査結果との照合は不可能なため、本報では今回の調査結果のみの報告とする。歯肉出血に関して、健全な者（歯肉出血コード 0）は年齢階級が上がるに従って減少傾向にあることがわかった。全体で見ると、出血がある者（歯肉出血コード 1）はおよそ 6 割であり、全国値（41.0%）を上回っている。

表 1 5 : 歯肉出血 (%)

歯肉出血						
	35～44歳	45～54歳	55～64歳	65～74歳	75～84歳	全体
歯肉出血0	45.9%	36.5%	38.4%	32.7%	29.9%	36.6%
歯肉出血1	54.1%	62.9%	59.6%	61.9%	61.9%	60.1%
歯肉出血9	0.0%	0.5%	0.0%	0.5%	1.0%	0.4%
歯肉出血X	0.0%	0.0%	2.0%	5.0%	7.1%	2.8%

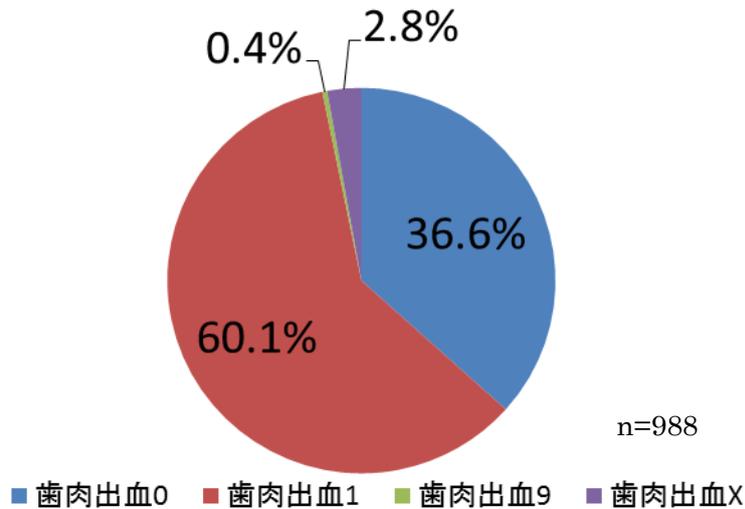


図15: 歯肉出血 (CPIのBOP)

(6) 歯周ポケット (CPIのPD)

CPI検査における判定基準の変更があったが、本項目については過去の調査結果との照合が一部可能であったため、推移を示す。歯周ポケット(PD)に関して、4~5mm(コード1)、のポケットを有する者はほぼ全て、6mm以上(コード2)のポケットを有する者は全ての年齢階級で増加傾向にあることがわかった。今回の調査のみでみると、65~74歳までの年齢階級において、コード2保有者の増加傾向が認められる。全体で見ると、歯周疾患が疑われる者(コード1+コード2)は64.5%であった。前回調査時(52.5%)から増加傾向が認められた。また、全国値(55.5%)を上回る結果となった。

表16: 歯周ポケットの状況

歯周ポケット(コード1)					
	35~44歳	45~54歳	55~64歳	65~74歳	75~84歳
H16	25.3%	28.0%	32.3%	38.8%	34.3%
H23	32.6%	35.1%	35.5%	38.2%	31.1%
H29	39.2%	42.6%	41.4%	35.6%	40.1%

歯周ポケット(コード2)					
	35~44歳	45~54歳	55~64歳	65~74歳	75~84歳
H16	9.4%	18.2%	21.1%	15.0%	19.6%
H23	7.4%	14.9%	19.1%	25.3%	23.0%
H29	11.9%	22.8%	29.8%	32.7%	25.9%

歯周疾患が疑われる者						
	35~44歳	45~54歳	55~64歳	65~74歳	75~84歳	全体
H23	40.0%	50.0%	54.6%	63.5%	54.1%	52.4%
H29	51.0%	65.5%	71.2%	68.3%	66.0%	64.5%

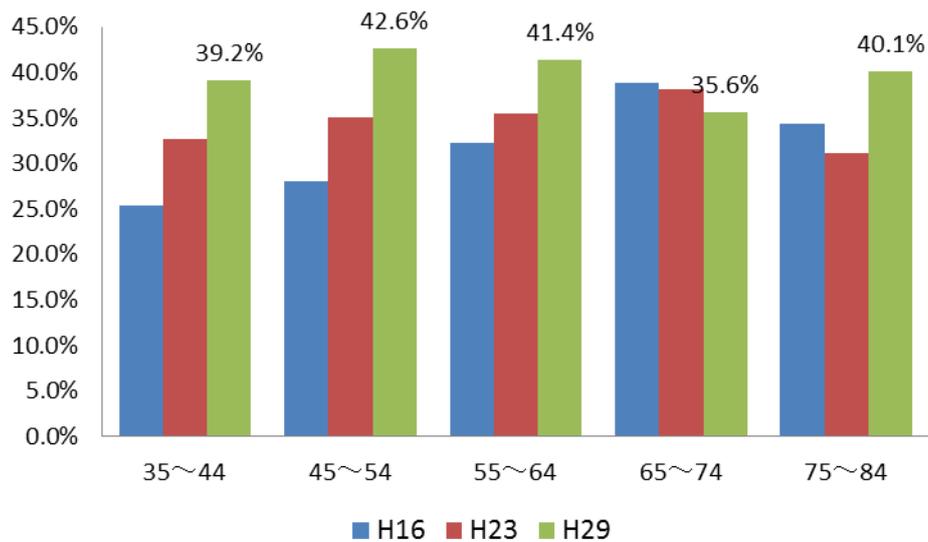


図 1 6 : PD コード 1 保有者の年齢階級別推移

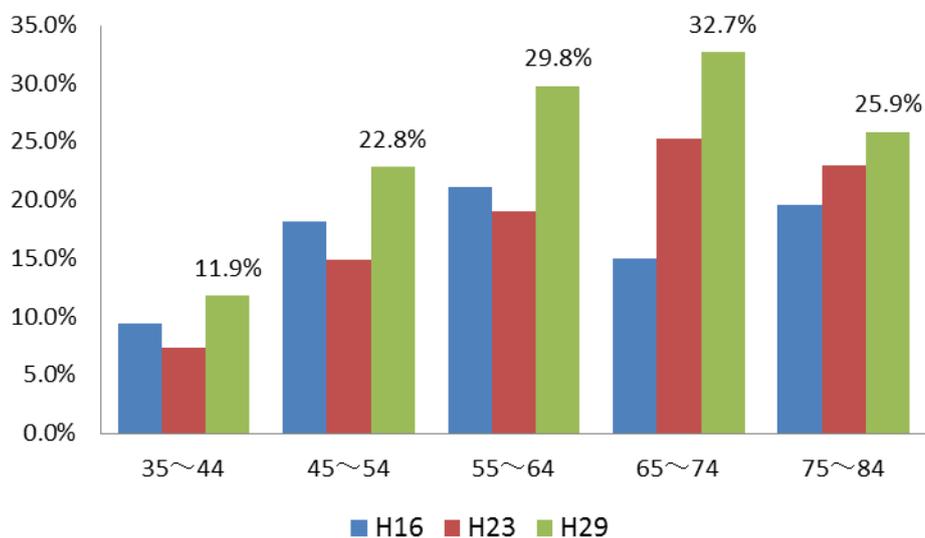


図 1 7 : PD コード 2 保有者の年齢階級別推移

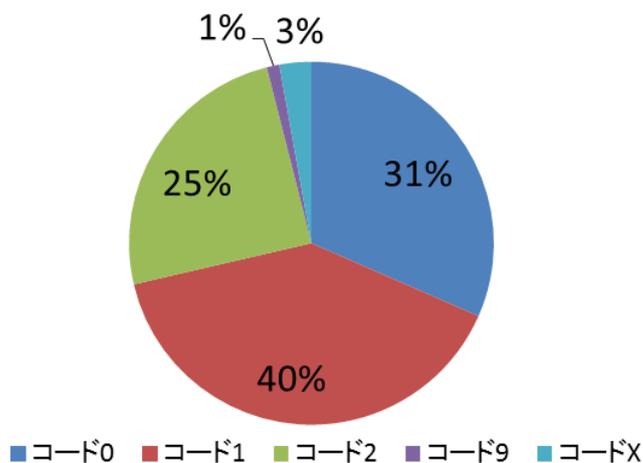


図 1 8 : H29PD コード別保有者率

Ⅲ まとめ

本調査により明らかになった点は以下のとおりである。

1. 問診事項

(1) 歯ブラシの使用状況

毎日3回以上磨く者の割合が、前回調査時よりもほぼ増加していた。全体では「毎日2回磨く」者が45.9%で最も多く、次いで3回の39.7%であった。(P3、図表1)

(2) 歯間清掃器具の使用状況

前回調査時よりも全ての年齢階級で増加していた。また、全体で見ると使用する者の割合が使用しない者の割合を上回る結果となった。(P4、図表2)

(3) 歯科検診

歯科検診を定期的に受ける者の割合が、全ての年齢階級で前回調査時よりも増加していた。また、全体で見ると、「受けている」者の割合が、「受けていない」者の割合を上回る結果となった。(P5、図表3)

(4) 歯石除去や歯面清掃の状況

全ての年齢階級で前回調査時よりも増加していた。特に、高齢者層で大きく増加していた。(P6、図表4)

(5) かかりつけ歯科医について

前回結果と特に変わりはないが、75歳～84歳の高齢者層で4%程度増加していた。また、全体で見ると、「決めている」がおよそ9割と大多数を占めていた。(P7、図表5)

(6) 喫煙習慣の状況

前回調査時よりも全ての年齢階級で減少していた。また、一日の喫煙本数の平均についても全ての年齢階級で減少していた。全体で見ると、喫煙習慣ありが14.7%、なし84.9%、平均本数が14.7本、喫煙開始平均年齢が21.7歳という結果となった。(P8、図表6)

(7) 食事時のむせ・食べこぼしの状況

「時々ある」と回答した者は、年齢階級が上がるにつれて増加しており、75～84歳の年齢階級においては20.8%であった。全体で見ると、最多は「まったくない」の53.8%であった。「頻繁にある」と「時々ある」を合わせると、11.2%という結果となった。

(P9、図表7)

(8) 「たくあん」程度の固さの食品を噛みきれるか

噛むことに困り感がある者は年齢階級が上がるにつれて増加していた。全体で見ると、最多は「問題無く噛める」の82.6%であった。「頻繁にある」と「時々ある」を合わせると、17.2%という結果となった。(P10、図表8)

(9) 「オーラルフレイル」という言葉について

全ての年齢階級において、「知らない」と回答した者が80%を超えていた。「知っている」および「聞いたことはある」と回答した者が最も多かった年齢階級は45～54歳で、17.8%であった。全体で見ると、「知らない」が87.6%という結果になった。(P11、図表9)

(10) 既往歴の状況(複数回答)

年齢階級が上がるに連れて疾患のない者は減っていった。全体で見ると、「ない」が63.5%で最も多く、次いで「高血圧」の19.5%という結果になった。なお、歯科領域と関連の深い疾患である、糖尿病の者は9.1%であった。(P12、図表10)

2. 歯科検診結果(歯牙の状況、歯肉の状況)

(1) 一人平均現在歯数

ほぼ全ての年齢階級(65～74歳は微減)で、一人平均現在歯数は増加していた。なお、今回調査の全年齢階級における一人平均現在歯数は24.1本であった。また、80歳で20本以上自分の歯を有する者の割合(推計値)は55.3%、60歳で24本以上自分の歯を有する者の割合(推計値)は、63.0%であった。(P13、図表11)

(2) 一人平均むし歯数(DMF歯数)

全体で19.1本、D歯1.0本、M歯4.8本、F歯13.3本であった。前回調査より、総数で0.4本増加しているが、D歯、M歯は減少し、F歯が増加していた。(P13-14、図表12)

(3) 口腔清掃状態

口腔清掃不良者は、65歳からの高齢者層で増加する傾向にあることがわかった。全体で見ると、「普通」な者が最も多くおよそ半数を占めていた。(P14、図表13)

(4) 歯石の沈着

年齢階級による傾向などは特に認められなかった。全体で見ると、「軽度」、「中等度以上」合わせて69.5%に歯石付着が認められる結果となった。(P15、図表14)

(5) 歯肉出血(CPIのBOP)

健全な者(コード0)は年齢階級が上がるに従って減少傾向にあることがわかった。全体で見ると、出血がある者(コード1)はおよそ6割であった。(P15-16、図表15)

(6) 歯周ポケット(CPIのPD)

歯周ポケット保有者は、ほぼ全ての年齢階級で増加傾向にあることがわかった。今回の調査のみでみると、65～74歳までの年齢階級において、コード2保有者の増加傾向が認められる。全体で見ると、歯周疾患が疑われる者(コード1+コード2)は64.5%であった。(P16-17、表16、図16-18)

IV 調査考察

1. 問診事項について

歯ブラシおよび歯間清掃器具の使用状況が上向きであったことから、県民の口腔衛生に関する意識の向上がある程度はなされたと考える。また、「歯石除去や歯面清掃を定期的に受ける者」が増加していることから、歯周病予防に関する様々な啓発が徐々に浸透しつつあることが示唆された。しかし、増加傾向にあるとはいえ、全体でもおよそ4割程度であり、歯周病予防の主ターゲット層である30代・40代の受診率は3割程度とまだ低いことから、さらに啓発を進めていくことや、30代・40代に的を絞った施策や制度を検討する必要があるだろう。なお、「かかりつけ歯科医を決めている」者が高値であったが、本調査は歯科医院に来院している患者を調査対象としているため、一般的な現状を反映するための十分なデータではないと考える。

喫煙習慣について、平均本数と共に減少傾向にあるが、引き続き歯周病と喫煙（受動喫煙含む）の関係性を啓発すると共に、関係機関との連携の強化を進めていく必要があると考える。

口腔機能関連の問診項目を今回の調査から新たに設けた。「オーラルフレイル」という言葉を知っている者は、新しい概念ということも考慮しても著しく少なく、普及啓発を強化していく必要性が高いと考える。「むせ・食べこぼしの状況」と「固い食品を噛みきれるか」という項目は、いずれもオーラルフレイルを構成する要素の一部である。後期高齢者のおよそ10人に1人(11.2%)が両方に該当し、予備群（どちらか一つ該当）はおよそ3人に1人(33.5%)であった。早期からの介入により、オーラルフレイルの発現を遅らせることができるという知見も出てきているため、前述の普及啓発と共に、早期からの口腔機能支援を充実させていくことが重要であると考えられる。

既往歴の状況について、複数の疾患を回答した者は、年齢階級が上がるにしたがって増加傾向があり、全体で言うとおよそ10%であった。疾患別で見ると、歯科領域と関連の高い疾患である糖尿病患者が9.1%と少なかった。「歯周病を治療すると糖尿病が軽減する」、「歯周病予防が糖尿病予防になる」などの知見が集約されつつあり、糖尿病患者（予備軍含む）が歯科医療機関を受診する意味は大きいと考える。本調査においても、糖尿病と回答した者のおよそ8割に歯周病の疑いが強くあることが分かった。今後は、歯周病と糖尿病の関連について、ターゲットを絞って啓発するなどの工夫や、医科医療機関から歯科医療機関に糖尿病患者を紹介する等の連携を強化する体制づくりを推進していく必要があるだろう。

2. 歯科検診結果について

一人平均現在歯数は全国的に年々増加傾向にあり、本調査でも同様の結果となった。8020達成者（推計値）は、55.3%と、全国値（51.2%）を上回る結果となった。しかし、6024達成者（推計値）は63.0%と、全国値（74.4%）から大きく差が出る結果となった。DMF歯数関連については、前回調査よりD歯、M歯は減少し、F歯が増加しており、この結果のみで考えると、「歯科治療により歯を治療した者が増加した。」ということになる。しかし、40歳でD歯を持つ者の割合（推計値）は49.2%と、全国値（35.1%）と大きな差が生じており、また、40歳で喪失歯のない者の割合（推計値）は62.4%と、こちらも全国値（73.4%）との差が生じている。これらのことより、高齢期の口腔状態は比較的良好といえるが、いわゆる「働き盛り世代」についてはお世辞にも良好とは言えない状況であることが分かった。今後は、「働き盛り世代」、つまり職域に対するより強力なアプローチを様々な職種の垣根を越えて推進していくことが重要と考える。

口腔清掃状態については、45～54歳の年齢階級から良好者の減少が始まっている。この時点では清掃状態が「普通」な者が多いが、この後、高齢期になると不良者が増加していることから、この時点での意識の低下がその後に影響を与えていると考える。45～54歳は、一般的な勤労者で考えれば管理職などの役職に就く年齢階級であり、繁忙で口腔衛生がおろそかになる、という仮説が成り立つかもしれない。BOP（=歯肉炎）者、PDコード1（軽度歯周炎）の者がこの年齢階級で一気に増加していることも、この仮説の信憑性に寄与するのではないだろうか。

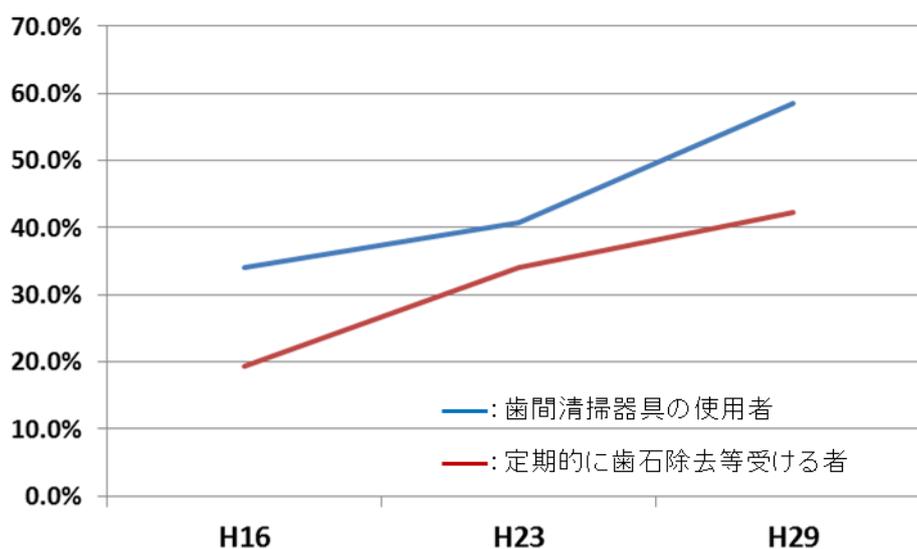
判定基準が変わったとはいえ、「歯周疾患を有する者の増加」が、本調査のみならず国の調査（歯科疾患実態調査）でも明らかになったことから、やはり従来よりも早い段階でのアプローチが重要と考える。また、前述のとおり、45～54歳の年齢階級から様々な変化が認められるため、職域における歯科口腔保健を推進していく必要性を感じる。

最後に、本調査に関わった関係機関、ご協力をいただきました歯科医院、調査にご協力頂きました患者様に心から感謝申し上げます。

V 参考資料

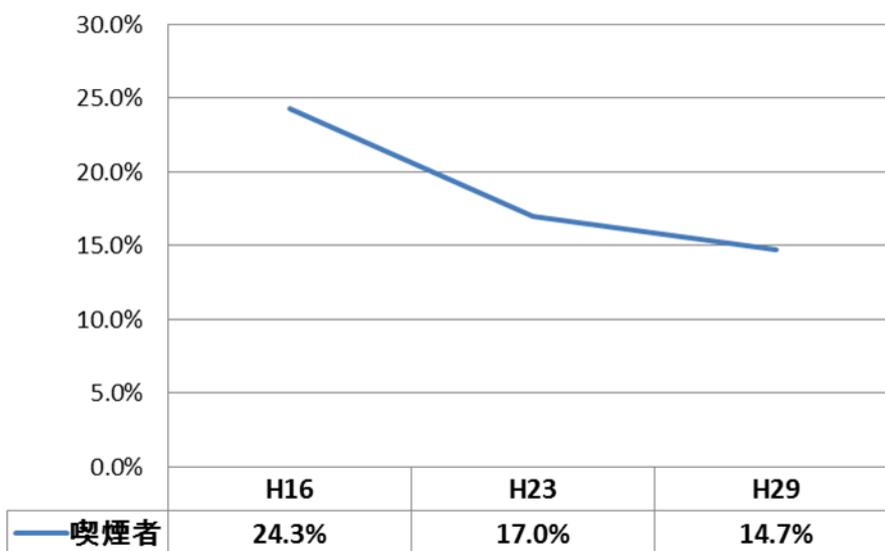
1. 問診事項

- ・「歯間清掃器具（フロス、歯間ブラシ）の使用」（40.7%→58.3%）、「定期的に歯石除去や歯面清掃を受けている者」（34.1%→42.3%）が前回調査時（H23）よりも増加しており、歯科口腔保健に関する意識の向上が示唆された。

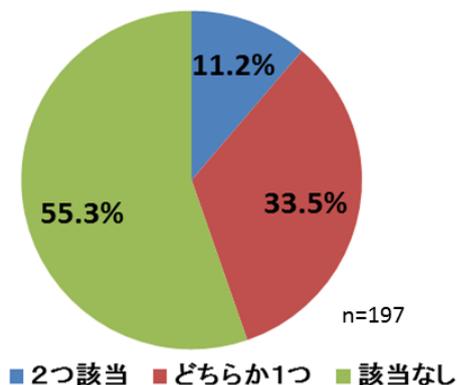


	H16	H23	H29
歯間清掃器具の使用者	34.0%	40.7%	58.5%
定期的に歯石除去等受ける者	19.3%	34.1%	42.3%

- ・喫煙者について、前回調査（H23）に比べて減少していた。（17.0%→14.7%）



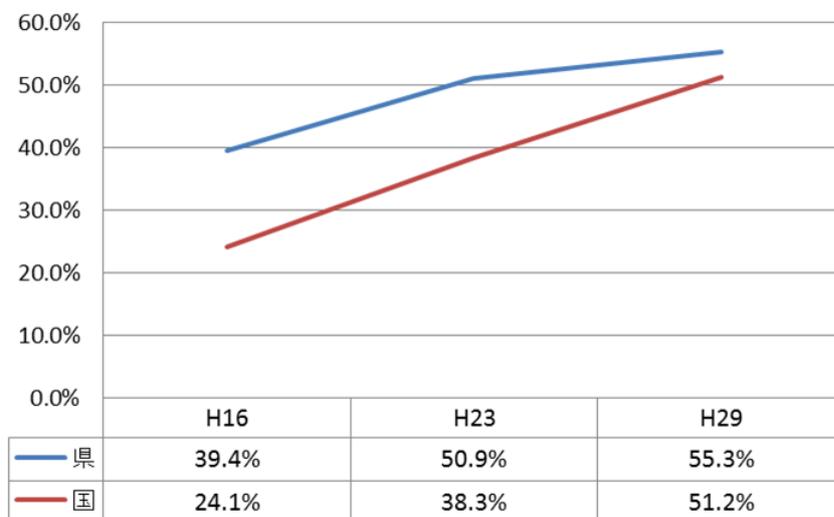
- ・「むせ・食べこぼしがある」、「固い食品を噛みきれない」は、後期高齢者のおよそ 10 人に 1 人が両方該当し、どちらか 1 つ該当はおよそ 3 人に 1 人。（新規項目）



	2つ該当	どちらか1つ	該当なし
口腔機能要件	11.2%	33.5%	55.3%

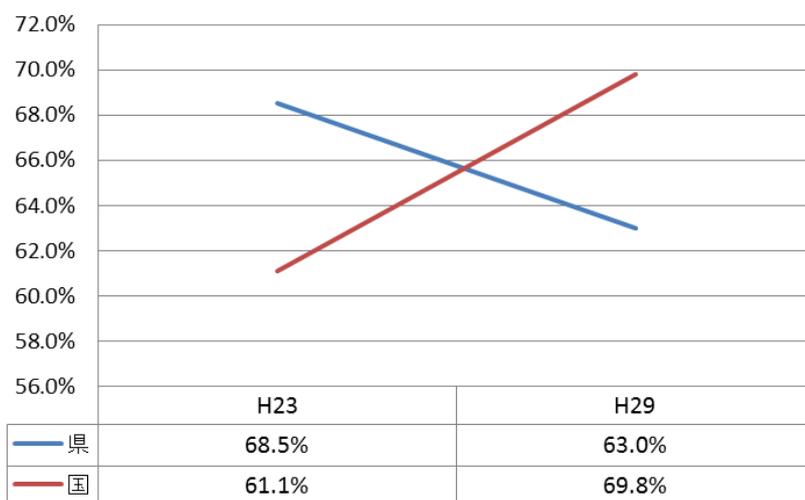
2. 歯牙の状況

- ・80歳で20本以上自分の歯を有する者の割合（推計値）は55.3%で、全国値（51.2%）を上回っている。

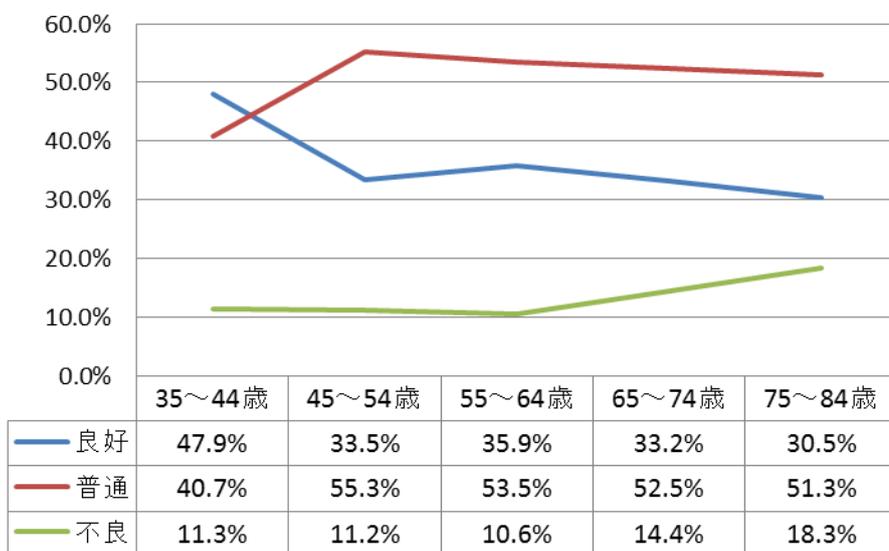


（注：全国値は平成 17 年、23 年、28 年の歯科疾患実態調査の数値より推計）

- ・ 60歳で24本以上自分の歯を有する者の割合（推計値）は63.0%で、前回調査時(H23)より減少し、全国値（69.8%）を下回っている。

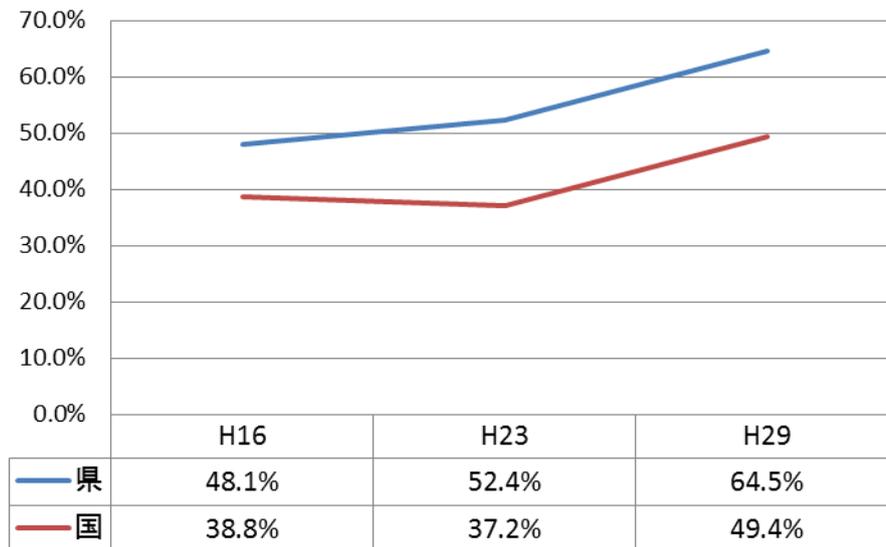


- ・ 口腔清掃不良者は65歳からの高齢者層で増加する。（新規項目）



3. 歯肉の状況 (CPI: Community Periodontal Index = 地域歯周疾患指数)

- ・歯周疾患が疑われる者の割合は6割を超え、前回調査 (H23) から増加している (52.4% → 64.5%)。また、全国値※ (55.5%) を上回っている。



(注：全国値は平成 17 年、23 年、28 年の歯科疾患実態調査の数値より)

補足：歯周疾患が疑われる者について、CPI の判定基準が変更になった影響で増加をしている可能性がある。

- ・歯周疾患が疑われる者を年代別に見ると、前回調査 (H23) と比較して、全ての年代で増加していた。

